



10月は乳がん月間

乳房を意識 普段から

女性の9人に1人が罹患(りか)んとすると言われている乳がん。現状や最新の治療法について、松山赤十字病院乳腺外科の西山加那子(か)子部長(45)に聞いた。

乳がんに関する最新の統計は、国立がん研究センターのウェブ「がん情報サービス」によると、2021年に乳がんが診断された数は9万9449例(女性9万8782例、男性667例)で、年々増加している。女性の中では一番多く、人(ひと)ごとは言えないがんだ。年代では30代後半から増え始め、40〜50代をピークに高い状態が続く。他のがんと比較すると、動き盛(もど)りや子育て中の患者さんも多いのが特徴で、検診で指摘された人や自己触診(じこさ)でしこりを見つけた人が来院して発覚(はつさく)することが多い。

乳がん患者が増えている背景は、人口の高齢化や食生活の欧米化に加えて、女性の社会進出に伴い、妊娠・出産年齢の高齢化や出産経験の減少により、乳がんの発現に関係していると言われる女性ホルモン「エストロゲン」にさらされる期間が長くなったことなどが原因と考えられている。また、乳がん全体の約4%は、BRCAという遺伝子の変異を持ったHBOC(遺伝性乳がん卵巣がん症候群)であることが分かっている。乳がんを発症した方で、家族に乳がんの人がいるなど特定の条件を満たす場合は、保険適用でBRCA遺伝学的検査を受けることができる。治療法や薬には近年どんな進化

女性の9人に1人が罹患(りか)んとすると言われている乳がん。現状や最新の治療法について、松山赤十字病院乳腺外科の西山加那子(か)子部長(45)に聞いた。

乳がんに関する最新の統計は、国立がん研究センターのウェブ「がん情報サービス」によると、2021年に乳がんが診断された数は9万9449例(女性9万8782例、男性667例)で、年々増加している。女性の中では一番多く、人(ひと)ごとは言えないがんだ。年代では30代後半から増え始め、40〜50代をピークに高い状態が続く。他のがんと比較すると、動き盛(もど)りや子育て中の患者さんも多いのが特徴で、検診で指摘された人や自己触診(じこさ)でしこりを見つけた人が来院して発覚(はつさく)することが多い。

乳がん患者が増えている背景は、人口の高齢化や食生活の欧米化に加えて、女性の社会進出に伴い、妊娠・出産年齢の高齢化や出産経験の減少により、乳がんの発現に関係していると言われる女性ホルモン「エストロゲン」にさらされる期間が長くなったことなどが原因と考えられている。また、乳がん全体の約4%は、BRCAという遺伝子の変異を持ったHBOC(遺伝性乳がん卵巣がん症候群)であることが分かっている。乳がんを発症した方で、家族に乳がんの人がいるなど特定の条件を満たす場合は、保険適用でBRCA遺伝学的検査を受けることができる。治療法や薬には近年どんな進化

治療法・薬 保険適用広がる 変化気づいたら早期受診を

乳がんの治療法や日ごろの心がけについて解説する
西山医師＝9月18日、松山市文京町

特集 乳がん 早期発見・治療を 18面

日ごろ、自分の乳房をどれくらい気にかけていますか。10月は乳がん月間。最新の治療法や早期発見のためにできること、経験者の声をまとめました。仕事に家事、介護に育児。何かと忙しいあなたが、自分の体と向き合うきっかけになりますように。





愛 GIVER project
社会で支える
がんとの暮らし

に、片方の胸を切除しても大好きな書道に打ち込み、力強く生きる女性の経験談を紹介する。
(増田有梨)

効果が高まる薬の開発が進んでいる。世の中にはがんに関するさまざまな情報があふれているが、国の研究機関や学会が発表している情報を参考にし、主治医と相談して自分に合った治療法を取り入れてほしい。

検診など予防のために個人ができることは、
検診を定期的に受けることはもちろんだが、日ごろから自分の胸に関心を持つ「プレストアウェアネス」の実践をお願いしたい。病変を見つけたら一生涯に必要はなく、入浴の際など生活習慣の中で自分の乳房を意識し、普段の状態を知っておくことに変化が気づくことができる。大事なものは変化があったら医療機関(乳腺外科など)を受診すること。次の検診まで待たずに、早めに受診することで早期発見につながる。

がみられるか。
乳がんは、手術、放射線、薬物療法を組み合わせた治療を行っている。最近では1・5センチ以下で転移を認めない早期乳がんであれば、乳房に針を刺して、ラジオ波でがんを焼く「ラジオ波焼灼療法(RFA)」が23年12月から保険適用となった。また施行できる施設は限られているが、乳房を温存したい患者さんにとって選択肢の

一つになるだろう。
薬も臨床試験が進み、保険適用のものが増えている。乳がんはサブタイプと呼ばれる分類によって、適した薬物療法が異なっており、患者さんの年齢、体力、希望などに合わせて治療方針を選択する。最近では分子標的治療薬や抗体薬(ADC)、免疫チェックポイント阻害薬などが登場し、副作用をできるだけ抑えつつ治療